

学術情報センター ニュース

第 14 号目次

- 英国文化省大臣来訪2
- アメリカン・センター図書館総合目録データベースに関する調印式3
- EXIRPTS 東京会議の開催4
- 《研究開発》
 - NSF との国際共同研究5
 - 学術雑誌総合目録 CD-ROM の舞台裏6
 - CD-ROM のキーワード作成10
 - スミス博士の学術情報センター来訪13
 - EAJRS (欧州日本資料専門家協会) 第 1 回年次総会14
 - 海外出張報告 — 中国18
 - 日本における国際書誌調整第 6 回公開講演会20
 - 《NACSIS サービス案内》
 - 学術情報ネットワークの停止21
 - 学術情報センターサービス休止のお知らせ21
 - 科学研究費による利用期限21
 - 学術情報センターシステムの継続手続き22
 - フランス CNRS の研究プロジェクト情報の登録22
 - 学術論文データベース第二系 (化学) の収録対象雑誌の拡大23
 - 学会発表データベースの参加学会の拡大24
- 研究者ディレクトリのサービス開始24
 - 希望者には電子メールの送り先名称の表示から個人名を外します25
 - 電子掲示板サービス「特定利用掲示板」の本格運用を開始します25
 - 市内局番変更のお知らせ26
 - 大学等紀要に関する実態調査の実施26
 - データベース・ディレクトリのデータ更新26
 - NACSIS-IR システム・データベース収納状況27
 - NACSIS-CAT システム・データベース構築状況28
 - 接続ニュース29
 - 電子メールシステム利用者マニュアルの発行29
 - NACSIS サービス Q & A (1)30
 - 《教育と研修》
 - 平成 2 年度第 1 回総合目録データベース実務研修を終えて37
 - 平成 2 年度学術情報センター・シンポジウム開催38
 - 《その他》
 - 学術情報センター電話番号39
 - 学術情報センター日誌40
 - 人事異動40

英国文化省大臣来訪

学術情報センターから国際ネットワークを通して、データベースサービスを提供している英国図書館は、英国文化省の管轄下に置かれています。

去る10月に日本各地で開かれた英国フェアに関連して、文化大臣のDavid Mellor 卿が来日され、10月3日には、文化省のLejeune 氏、駐日英国大使館文化部長 (Director of the British Council of Japan) の J. A. Barnett 氏、および同じくブリティッシュ・カウンシル図書館長 (Libraries and Books Advisor) Rozemary Shipsey 女史を同行して学術情報センターを訪問されました。

一行は、学術情報センターの使命、事業内容、研究活動などについてのビデオテープを含んだ当センターの説明に深い関心を寄せられ、細部にわたる質問をされました。

特に、学会発表データベースの斬新性と速報性や、緊密な国際協力の可能性などが話題になりました。さらに、新しく商業ベースで完成した学術雑誌総合目録のCD-ROM版に感心され、一セット贈呈いたしましたところ、大いに喜ばれました。

次に、目録講習会室に置いて、目録所在情報サービス・情報検索サービスのデモンストレーションをご覧になり、深く印象づけられたご様子でした。

最後に、今後ますます英国図書館と学術情報センターの積極的な資料交換および技術協



力の推進を支援したいとの希望を述べられて、センターを辞されました。



アメリカン・センター図書館総合目録データベース に関する調印式

「アメリカン・センター図書館総合目録データベース」は、本年7月30日から学術情報センターの情報検索サービス（NACSIS-IR）において、提供サービスを開始していますが、この程、データベースの作成者であるアメリカ合衆国大使館広報・文化交流局と検索システムの作成及び情報検索サービスの提供者である学術情報センターとの間で、相互の協力関係についての覚書の交換が行われました。



調印式は、平成2年10月16日、港区芝公園の東京アメリカン・センター図書館において行われ、東京アメリカン・センター館長トマス・レイモンド氏の立会いの下で、ロバート・ネヴィット局長と猪瀬所長が覚書に調印しました。

調印後、ネヴィット局長と猪瀬所長から、今回のデータベースの提供・公開の意義と今後の協力関係の抱負をこめた挨拶がなされました。

調印式には、両機関及びアメリカン・センターの他、各国の情報サービス機関、都内の主要図書館、専門図書館等の関係者が多数出席されました。

セレモニーのあと、学術情報センター職員による「アメリカン・センター図書館総合目録データベース」の実演デモが行われ、参加者の大きな関心が寄せられました。

このデータベースの提供・公開の意義は、アメリカ研究資料の所在の確認が容易になる、あるいは原文献の入手についても積極的な現物貸借等により容易になる、等の点にある



ことは疑いを入りませんが、同時に在日外国情報サービス機関と学術情報センターの協力関係の第一歩でもあります。外国との学術情報の双方向の流通の重要性が叫ばれる中において、今回の協力関係の成立が一つの契機になることが望まれます。

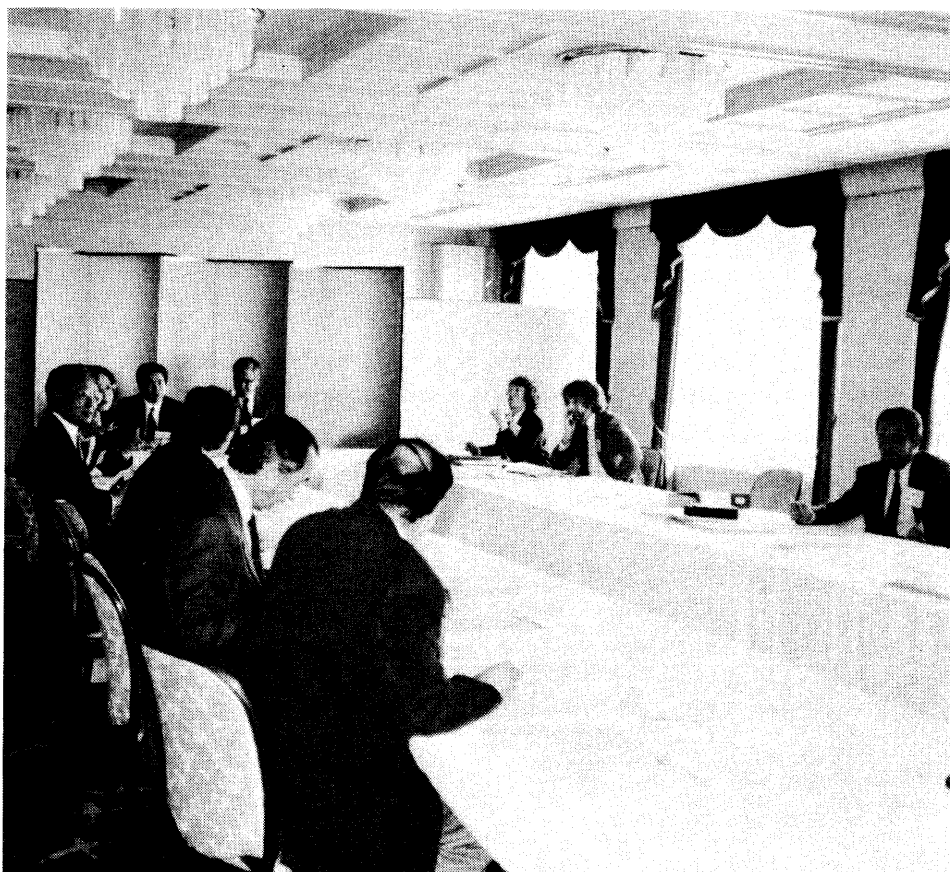
なお、「アメリカン・センター図書館総合目録データベース」の概要及び利用法については、本誌前号でお知らせした通りです。

EXIRPTS 東京会議の開催

EXIRPTS（研究情報の国際交換に関する専門者会合）は、先進8ヶ国（日、米、英、独、仏、伊、加、スウェーデン）における研究支援機関の情報専門家をメンバーとし、各機関の所有している研究情報を相互に交換するための手法について検討をすすめているものです。（詳細は本センターニュース13号参照）

この度、第8回 EXIRPTS 会議が東京・竹橋会館において、加盟各国9機関（我が国は本センター及び JICST が加盟）から代表が参加し、11月6日～9日の日程で開催されました。

本会議は、研究情報の国際交換を実施するに当り、技術的な問題、運用上の問題等を検討するため毎年2回開かれているものです。今回は多言語辞書の考え方の報告、情報交換プロトコル（ENID2）等に関する検討が行われました。



NFS との国際共同研究

学術情報センター教授

あさの しょういちろう
浅野 正一郎

学術研究の国際化に伴い、学術情報センターも海外の機関と協力した国際事業を計画することが必要であるとの認識に達した。この結果、1988年から文部省科学研究費補助金による国際共同研究が、学術情報センターと米国 NSF (National Science Foundation; 米国科学財団) との間で開始された。学術情報センター猪瀬博所長と E. Bloch NSF 長官との交遊が、共同研究を円滑に開始した背景にあった。

共同研究は3点について実施されている。第一は、学術情報センターが所有するデータベースを米国の研究者に提供することである。第二は、学術情報センターが運用する学術情報ネットワークと米国のネットワークとを直接接続し、その運用方策を検討することである。第三は、現在先進八国間で科学研究プロジェクトのデータを相互交換することを予定しているが、学術情報センターと NSF でその試行案を検討することである。

第一点については、1989年の1月に NSF に設置した交換機と端末装置 (IBM5550) を使用して、米国から学術情報センターのデータベースサービスの利用を可能としている。共同研究の間は試行運用となっているが、NSF では代行検索者を配置し、研究者からの依頼に応じて代行検索を行っている。本年8月から、依頼受付の範囲を拡大しており、利用は大幅に増加している。

現在は、学会発表、学位論文、科学研究費、学術雑誌総合目録等のデータベースを試行の対象としているが、中でも学会発表データベースの利用が増している。現在は共同研究の範囲を広げ、米国議会図書館にも端末を設置して、データベースの試行サービスを行っている。この試行により、学術情報センターのデータベースを米国で利用する実態を知り、その評価を今後のサービス仕様に反映することが可能と考えている。

第二のネットワークの接続は、1989年1月から部分的に開始している。当初は、学術情報センターが NSF に設置したワークステーションを介して、電子メールのネットワークである CSNET にメール接続を開始したが、その後 George Washington 大学の協力を得て、BITNET に向けたメール接続も実現し、更に国内の MHS によるメールと CSNET / BITNET との相互接続も可能となるなど発展している。

現在もこれらの運用が本共同研究のもとで行われているが、新たに学術情報ネットワーク上の TCP / IP (Transmission Protocol / Internet Protocol) による Internet と米国の Internet を相互に接続するための検討も実施している。

第三の項目は、各国が所有する科学技術研究プロジェクトデータベースを相互に利用するために、要求の表現法と伝送法、結果の返送法、利用資格等を共通化しようとしている。NSF との間では、この原案作成のための協議が行われている。

本年も、ワシントンでの協議に加えて、米国から2名の研究者が学術情報センターを訪問し、協議を重ねている。また共同研究の最終年度として、当面の検討課題について結論を出すとともに、安定な運用に入るための機関間の合意を策定することを予定している。

学術雑誌総合目録 CD-ROM の舞台裏

学術情報センター助教授

はし つめ ひろ たつ
橋 爪 宏 達

センターニュースですでに報告（'90年3月）したように、学術雑誌総合目録 CD-ROM 版（以下、学総目 CD-ROM）が完成し、販売されている。本号に、その製作にまつわる「苦労話」を掲載したら、という提案があった。完成品はたった直径 12cm の円盤であるが、ここには 400MB あまりの情報が詰めこまれているのであり、これだけの作業となると、やはり幾らかの「苦労」もあったのである。読者の中には実際にこの CD-ROM に触れておられる方もあろう。そのような方に少しでも親近感を持って頂ければと思い、作成課程の舞台裏を紹介してみたい。

試作盤の教訓

センターでは、今回の CD-ROM を出版する 2 年前に、学総目 CD-ROM の試作盤を作成していた。これは当時、学総目の和文編が完成したのを受けてのプロジェクトであり、図書館でモニタ使用していただいて、将来の本格盤に向けての基礎的なご意見を寄せてもらうことを目的としていた。

試作盤はおおむね好評であり、我々としては自信をつけた。和雑誌タイトル中の「語」による検索など、学情センターのホストシステムを超える機能も盛りこんであり、そういった努力が評価されたものと思う。

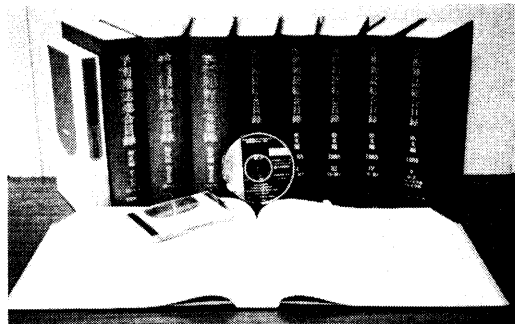
それに対して、検索の「遅さ」は不評だった。確かに試作盤では、ある種の書誌検索に 1 分近くかかることもあり、これではっきり「使いものにならない」と言われなかったのは、モニタされた図書館の方々の寛大さによるものである。

今回の市販を前提とした CD-ROM では、この遅さを何とか解消しなければならない。

もう一つの問題は、和文編と欧文編をどうまとめるか、ということだった。冊子体の学総目は、これまで和文編と欧文編を分けて出版していた。これは学総目の編集プロセスを反映している。我々は数年おきの全国調査を基本に学総目を編集していて、この調査は和文と欧文を分けて、一回おきに実施するからである。今回の ROM も和洋に分けて出版するか、それとも一枚にまとめるものの、内部は和と洋を分けた構造にする（学情センターオンライン方式）か、あるいは完全に和洋を混ぜた構造にするのか、3通りの選択がある。それを決定する必要があった。

和洋混配の決定

我々としては 3 番目の方式を採用すること、つまり和洋を完全に混ぜてしまうことに決定した。利用者の便利を考えると、これが最も



よい、と考えたのである。(商業的な側面や作業の効率を考えたら、おそらく別の決定になったであろう。)

心配されたのは「物理的に入るか」という問題である。写真のように、冊子体学総目は和洋(それに変遷リスト)を集めると9冊という大部である。ROMに入れられる最大容量は500MB、超過は許されない。

CD-ROMには本体データに加えインデックス(索引)情報を焼きこむ。インデックスは本体データの数割程度の大きさになることが多く、無視できないのであるが、最終的にどうなるのかは「作ってみなければわからない」のだ。大きさの見積りは試作盤(和文データだけ)を参考にするしかない。欧文データからどんな索引ができるか、確とした見通しはできない。しかし、あれやこれやから「何とか行ける」と判断した。

大西方式の導入

もう一つの課題は、検索時間の短縮である。和洋混配の結果インデックスが増えると、検索時間は更に増える。何か抜本的な対策を行っておかねばならない。試作盤の検索ソフトウェア開発を担当した大日本印刷のエンジニアと、検索のどのステップで時間を消費しているのか、検討会が続いた。

もともとCD-ROMの読み取り機構は顕微鏡と等価な光学システムで、磁気ディスクのそれと比べると大変な重量物である。これを振り回して目ざす場所に持っていきのだから、CD-ROMは磁気ディスクに対してアクセス速度で不利な立場にある。磁気ディスクは、1秒間に40回くらいの乱アクセスをできるのに対し、CD-ROMは1~2回である。そのため、CD-ROM上のインデックスはなるべく少ない回数の参照で最終的なデータを引きあてられるように、あらかじめ工夫しておかなければならない。

大日本印刷との検討の結果、意外なことがわかった。論理番地と物理番地の変換に時間を使っていたのだ。

論理番地と物理番地とは、たとえ話をすれば次のようなことである。個々の書誌情報は、書誌ファイルという商店街に並んだ商店のようなものだ。各店舗は並びの順の「論理番地」を持っている。これは、店舗の大きさには関係なく順番に振られる。それに対してCD-ROMを読み取るときは、「物理番地」を使う。これは各店舗が、商店街の入口から測って何メートルの所にあるか、を表わしたようなものだ。

検索の過程は、すべて論理番地で進められる。それに対して実際のデータにあたるときは、表をひいて論理番地に変換するのだが、この表はかなりの大きくなり、パソコンのメモリに納まりきらず、フロッピディスクとの間でメモリの退避、復旧をくり返して時間を消費していたものである。

論理番地の使用は学総目CD-ROMの根幹をなすものだ。これを使って「各館別の所蔵状況」「和洋別の検索」などを高速に実行できるのである。交換にパソコンのハードディスクを使えばもう少し速くなるが、利用者のパソコンに必ずしも装備されているとは限らない。大容量のメモリをパソコンにつけていれば表全体をあらかじめメモリに入れておく手もあるが、最低のハードウェア要求事項を考えると、やはりそうはいかない。

パソコンのハードウェアに応じて、ハードディスクを持っている人、メモリの大きな人、などと差別化した検索ソフトにしなければならないか、と諦めかけていたとき、事業部の大西さんがすばらしいアイデアを出してくれた。さき程の商店街のたとえを使えば、各店

舗の間口をみんな同じ長さにしてしまえ、と言うのだ。そうすれば論理番地に統一の間口長さをかければ、変換表なしで物理番地を得られる。

実際の書誌データは一個一個異なったサイズを持っている。それを統一した間口（ブロック）に押し込めば、あるものは余白を生じ、あるものははみ出してしまう。

最適なブロック長は、大部分の書誌データが収まるものということで設定した。はみ出すデータは、その部分を「飛び地」へ収容することにした。当然余白を生じるものもあり、その分だけディスク容量を圧迫することになるが、論理番地（使い勝手）と検索速度を両立させるのに不可欠の方法、ということで採用に踏みきった。提案者の名にちなみ、大西方式と呼ぶ。

ディスクで手こずる

CD-ROMの編集作業は、具体的には次のようになる。

1. コード変換

学術情報センターのデータベースは、日立制作所製 HITAC 大型コンピュータの中に、日立方式の文字コードで格納されている。CD-ROMにするにあたっては、この文字コードをすべて「EUC コード」と呼ばれる標準コードに変換しなければならない。

2. 書誌データの並べかえ

書誌データを和洋混合したうえ、書名の辞書的順序で並べかえてやる。なお、これで初めて書誌データの論理番地が確定する。

3. インデクス作成

各書誌データから、それを引きあてるのに必要な索引情報、すなわちインデクスを作成する。この作業は CD-ROM 編集全体の中心をなし、もっとも時間と注意力を要求されるものだ。くわしくは、この後の影浦さんの記事を読んでいただきたい。

4. 書誌データと所蔵データの対応づけ

各書誌データに、その大学別の所蔵状況を表わす所蔵データを対応づける。

5. その他のファイルの整理

参加組織（図書館名）のファイル、和書洋書識別のテーブルなど、細々としたファイルを作成してやる。

これらの作業は、各ステップごとに結果を注意深くチェックしながら進めなければならない。小まわりのきき易さや使用文字コードの点から、全面的に SUN ワークステーションというコンピュータを使用して行なった。しかし、最終的に 500MB 近くなるはずのデータを編集するためには、少なくともそれを超える容量の磁気ディスク装置を用意しておかねばならない。

500MB 級の磁気ディスク装置は、従来はかなり大ききなもので、図体、電力消費ともに大きく、あまりワークステーションにマッチする機械ではなかった。ところが当時、富士通が超小型の 600MB 磁気ディスクを販売したので、それを 4 台買ってきてワークステーションにつけてやることにした。CD-ROM の編集作業は、実際にはこの磁気ディスクの収容箱づくり、つまりアルミ棒やアルミ板を切ったり、穴をあけたり、で始まった。600MB ディスクを 4 個装備した、2.4GB の集合ディスク装置は、しばしの金属群との格闘のすえ完成した。これで CD-ROM 編集の準備はすべて整ったか、に見えた。

ところが、この自作ディスクは、時々、何の前ぶれもなく不調になるのである。一度調子をくずすと、中の全データをこわして再フォーマットしないと回復しない。かなり大きなファイルを扱っているときにこの不調が起これり、結果として数日分の作業が無に帰したときなど、あまり愉快的気分にはならないのであるが、実際の編集作業に当たってくれた影浦さんは、何度もそれを経験することになる。

筆者は後で書くような事情で、日本でその愁嘆場の起きている時期はほとんどアメリカに滞在していた。だからディスク不調にかかわる騒動とその始末は、全部影浦さんと安達先生の手をわずらわすことになった。

問題のディスクは「橋爪ディスク」と命名され、とうとう編集作業中まともに動くことはなかった。

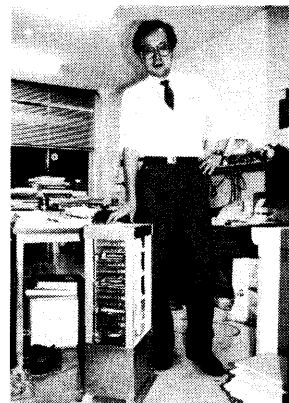
安達先生の努力で不調の原因はいろいろ調査されたが、どうやら使用した富士通製ディスクユニットが、その製品としての最初期のロットのもので、いわゆる不良品なのであるまいか、ということになった。そこでディスクの取り次ぎ店のご好意で不良ディスクは別の客のところへ転売して、かわりに日立製作所製の同様の容量のディスク（富士通製に続いて発売された）と入れかえてもらった。筆者としては、くだんのディスクが新しい所有者のもとで、健全に稼働していることを祈るばかりである。

筆者、アメリカへ

ディスク騒動が起きて、CD-ROM作成の前途に暗雲のたちこめていた頃、筆者は米国での長期研修で日本をはなれることになった。関係各位はうらめしそうな顔をしておられたが、その心中を察するに、筆者としても心が痛んだ。ただ、アメリカへ着いてしまうと、不思議と気持ちは晴れてきて、何やら客観的な気分になっていたのだが、これが甘かった。

今やコンピュータネットワークの時代である。米国の滞在先のコンピュータから、あるいは下宿に置いた端末機から、日本にあるSUNワークステーションと自由に接続できるのである。そのため一時は（時差の関係で）徹夜で日本でのCD-ROM編集作業につき合い、しばらく日夜の逆転した生活を送って、また「時差ボケ」の回復のため苦しむことになった。

コンピュータネットワークは事実偉大であるが、海外出張しても仕かかち中の仕事から逃げられなくなる効果もある、と再認識した次第だ。



CD-ROM のキーワード作成

学術情報センター助手

影 浦 峡
かげ うら きょう

1990年の3月に学術雑誌総合目録CD-ROM版(学総目CD-ROM)が完成したことについては、すでに以前のセンターニュースでお知らせした通りです。CD-ROM版の特徴としては、次のような点を挙げることができます。

1. 和雑誌と洋雑誌の同時検索ができること。
2. コマンド方式でなくフィールド穴埋め方式を採用し、また、ファンクション・キーによる操作を中心としたため、操作が簡単になったこと。
3. 出版地や言語コードのようにほとんど使われない検索機能を落として、所蔵館の地域からの絞り込みや図書館のサービス情報の確認などの機能を容易に使えるようにしたこと。
4. 日本語のキーワード検索において検索語の単位を意識しない検索を可能にしたこと。

これらの特徴を持たせるために、学術情報センターでは、目録データベースのデータをもとに様々な加工を施してCD-ROM用データを作成しました。施した加工の中身は多岐にわたりますが、ここでは実際に利用される方に最も関係の深い、誌名・団体名キーワード索引の作成過程について簡単に紹介して行きたいと思います。

誌名・団体名索引を作るために最初に行わなくてはならないことは、学総目の書誌データファイルから、索引作成に必要なフィールドを取り出すことです。和洋がありますから、必要なフィールドは、和雑誌誌名の原表記(べた書きでフィールド数は約6万)、和雑誌誌名の読み(分かち書き、約6万)、和雑誌団体名の原表記(べた書き、約4万)、和雑誌団体名の読み(分かち書き、約4万)、洋雑誌誌名(分かち書き、約15万)、洋雑誌団体名(分かち書き、約4万)の6種類です。もちろん、これらのフィールドを取り出すにあたっては、どの書誌レコードから取り出したものかを識別する番号も保持しておきます。

次に、和雑誌の誌名と団体名の原表記は分かち書きされていませんから、これらを分かち書きする処理を施します。たとえば、『『イスラム化』にかんする共同研究報告』という誌名は『『_イスラム化_』_にかんする_共同_研究_報告』のようになります(ここで“_”はスペースを表わします)。この作業は日立の大型計算機上で、自動分かち書きソフトウェアHAPINESSを使って行われました。これで、6種類のフィールドがすべて分かち書きされた状態になったわけです。次に、これらのフィールドに対して必要な正規化を行い、分かち書きの句切りにもとづいてキーワード分割を行い、さらに分割したキーワードに対して正規化を行います。そして、最後に最終的な索引のためのキーワード生成を行います。以下、各処理の内容を、順に、簡単に紹介することとします。

まず最初の正規化ですが、これには次のようなものがあります。以下で紹介する作業は、1を除いてすべてSUNワークステーションを利用して行なったものです。

1. 漢字について、たとえば「佐々木」を「佐佐木」とする踊り字処理を施し、また、「絵」と「繪」を「絵」にするような関連漢字の統一作業を行います。
2. 半角片仮名を全角片仮名に変換します。
3. 学術情報センターの目録システムで扱っている拡張文字コード EXC を、対応するラテン文字に変換します。たとえば「ä」は「a」とします。
4. ローマ・アルファベットの大文字の列で、各文字間にピリオドを含み、列の最後がピリオドで終わるものについて、ピリオドを取り除いて接続します。ただし、処理前のレコードも残す。たとえば、「I. E. E. E. micro」から「I. E. E. E. micro」と「IEEE micro」の両方ができます。
5. 次のような文字種の変換を行います。
 - a. ローマ・アルファベットの小文字を大文字に変換する。
 - b. 平仮名を片仮名に変換する。
 - c. 半角文字に変換可能な片仮名以外の全角文字は、半角文字に変換します。
 - d. 片仮名の小文字を大文字に変換します。たとえば「ャ」は「ヤ」となります。
 - e. ギリシャ文字およびキリル文字を大文字に統一し、さらにラテン文字に似たものはそれに変換します。たとえば「κ」は「k」に変換します。

以上の正規化を施した後で、ワードの分割を行います。ここで、英数字、片仮名、平仮名、漢字のどれかで始まり、これらの文字または長音、アポストロフィのいずれかが続く列をワードと見なします。以下の正規化とキーワード生成の処理は、分割されたワードを単位として行います。前出の『『_イスラム化_』_に_かんする_共同_研究_報告』という誌名からは、「イスラム化」「に」「かんする」「共同」「研究」「報告」がワードとして取り出されることとなります。このようにワード分割した後、分割されたワードに対して次のような正規化処理を施します。

1. 「OF」と「THE」を落とします。
2. 次のような語形態処理を行います。
 - a. 4文字以上の英字からなるワードについて最後の文字「S」を除去します。
 - b. アポストロフィを削除します。
 - c. 長音記号を削除して、文字を詰める。たとえば、「モード」は「モド」となります。
 - d. ワードの先頭の「L」や「D」を削除します。

さて、以上の処理により作られたワードを基本キーワードと呼ぶことにします。基本キーワードの数は、6種類のキーの延べ数が1694133、異なり数が127397となりました。

このようにして作られた基本キーワードをもとに、最終的なキーワード生成を行います。キーワード生成の処理は、和文と欧文で異なります。まず和文のキーワードは、隣接する基本キーワードを順次組み合わせていくことによって生成します。たとえば、「フランス文学語学研究」という誌名からは、「フランス」、「文学」、「語学」、「研究」という基本キーワードが抽出され、その基本キーワードを元に次のようなキーワードが作られます。

零次結合キーワード：「フランス」「文学」「語学」「研究」

一次結合キーワード：「フランス文学」「文学語学」「語学研究」

二次結合キーワード：「フランス文学語学」「文学語学研究」

三次結合キーワード：「フランス文学語学研究」

この例では、三次結合キーワードが誌名全体と一致していますが、もっと長い誌名や団体名では、より高次の結合からなるキーワードが作られることとなります。このように、基本キーワードを順次組み合わせることでキーワードを作ることにより、最初に述べたように、日本語のワードの単位を意識しないで検索ができるようになるわけです。

一方、欧文では、基本キーワードと誌名または団体名全体とを最終的なキーワードとして取ります。欧文では、ワードの単位がはっきりしているため、和文に施したような順次結合処理を行う必要がないからです。したがって、「Sixty Eight Micro Journal」という誌名から、「SIXTY」、「EIGHT」、「MICRO」、「JOURNAL」、「SIXTYEIGHTMICRO-JOURNAL」という5つのキーワードが作られることとなります。

このようにして6種類の異なるキーからなるキーワードが作られると、最後にこれらを一まとめにして、誌名・団体名キーワード索引として一本化します。もちろん、キーワードのアルファベット順に整列します。さて、このように一本化しても、それぞれのキーワードが誌名か団体名か、和雑誌か洋雑誌か、そのキーワードが誌名または団体名全体に一致するか、先頭に一致するか、おしりに一致するかという情報は持っている必要があります。このうち、誌名団体名の区別とキーワードの位置を表わす情報は、索引ファイルに付け加えましたが、和洋の区別に関する情報は、うっかり索引ファイルに加え忘れたので、別途ビットマップテーブルを作って検索のときにそのテーブルを通して区別することにしました。最終的に、キーワードの延べ数は2723439、異なり数は719992となりました。基本キーワードと較べて、延べ数で1029306個、異なり数で592595個増えたこととなります。これらの多くは日本語キーワードの順次組合せからできたものと考えられます。誌名・団体名索引を用いた検索でワードの単位を意識しなくてよいことは、こうした大量の組合せキーワードに支えられているわけです。

以上、誌名・団体名索引の作成過程を簡単に紹介してきましたが、ここで紹介した処理プロセスは当然、参加組織名キーワード索引の作成過程でも行われています。したがって、もちろん、参加組織名のキーワード検索でも、ワードの単位について余り細かく気にする必要はないわけです。

さて、全体の作業を終えてしまったあとで、このように振り返ってみると、そんなに困難なしに作業が済んだような錯覚を起こしてしまいがちですが、実際の作業では、いろいろな困難や失敗に直面しました。最後にそれらのいくつかを連ねてみたいと思います。

1. ディスクが壊れたこと。大容量のデータを処理するために大容量のディスクが必要だったのですが、頼みの綱の大容量ディスクが一時期頻繁に壊れてしまいました。
2. 計算機のユーティリティの制約をよく知らずに使っておかしなデータを作ってしまったこと。たとえば、uniq という道具があるのですが、扱える行長に限界があります。それを知らずにおかしなデータを作ってしまったことがあります。
3. 日本語の問題。索引をアルファベット順に並べるに当たって日本語と英語の順序が逆になってしまったこと。

そのほかにも細かい失敗や困難はありましたが、何せ予定から遅れずにCD-ROM版を出せたことは喜ばしいことだと考えております。今後のCD-ROMに役立てるためにも、今回のCD-ROM版を活用し、利用した感想をお聞かせ願えれば幸いです。

スミス博士の学術情報センター来訪

学術情報センター助教授

はし つめ ひろ たつ
橋 爪 宏 達

10月14日からちょうど2週間にわたり、スミスさん(Dr. Jonathan M. Smith)がセンターに滞在された。氏は昨年夏にコロンビア大学で学位を取得され、現在はペンシルバニア大学の計算機科学科で教鞭をとっておられる、少壮気鋭のネットワーク工学者。1959年生まれだから、当年31才、センターで招待した研究者としては最も若い人だろう。

筆者とスミスさんの出会いは1年前にさかのぼる。私は訪問研究者としてペン大に到着し、海外での研究生活を始めたところだった。そこに彼も新しい assistant professor (助手)として着任した。専門も同じだし、立場は違うが新参者として似た境遇だったり、意気投合したわけである。(というより、先方が私のことを心配してくれたのだろう。)

筆者はスミスさんを通して、米国の若い研究者が、日頃どんな方法で研究しているか実地に知ることが出来た。貴重な経験だった。ことに印象的だったのはコンピュータネットワークの活用法だ。コンピュータを研究者用ネットワークに接続して、その向こうにいる仲間と連絡をとり、縦横に情報交換をする。論文の草稿ができるとさっそくそれを電子メールや掲示板にかけ、仲間から意見をもらう。これを見ていると、米国は今世紀に映画だとか自動車だとか、いろいろ新しい生活様式を発明したけれど、ネットワークもそのひとつだなあと思えた。

ところで、去年は米国人にとって日本の存在がひととき不気味に映ったようだ。ソニーのコロンビア映画買収や石原慎太郎の著書などが米国で騒がれていることは、日本でも報道されたようだ。しかしそれに限らず、今後の米国にとって日本は非常に大きなファクターであるとして、知識人の一般的話題にしばしばとり上げられていた。そんな時、スミスさんは日本擁護にまわるのが常であった。曰く、「ベル研の駐車場に行ってください。日本車ばかり並んでいるから。エンジニアはよく知っているんだよ。」しかし、実は彼は奥様の故郷のブラジル以外に国外には出たことがないので、時々その議論が一面的になるようにも感じた。これは早く彼に日本を見てもらわねば、と思った。

帰国すると、学術情報センターに外国人招待に使える研究費があることを知った。それでさっそくお願いしてみたところ、幸い承諾を得られ、スミスさんをお招きできたわけである。

彼の滞在は我々にとっても先方にとっても実りの多いものになった。センターと東大で講演していただき、我々は米国のネットワーク研究の先端について知ることが出来た。一方彼もその講演や、IBM 研究所訪問、京大訪問を通して多くの知己を得た。また週末には日本の田舎を旅行され、そして京都、奈良なども周遊され、いろいろ見聞されたことと思う。

彼は帰国したが、ことによると今度は日本について辛口の批評をしているかもしれない。それでいいだろう。今度学術情報センターの感想を聞いてみようと思う。

EAJRS (欧州日本資料専門家協会) 第1回年次総会

学術情報センター教授

ね ぎし まさ みつ
根 岸 正 光

EAJRS (European Association of Japanese Resource Specialist: 欧州日本資料専門家協会) の第1回年次総会は1990年9月5日から8日の間、ブダペストの国際文化研究所 (Nemzetözi Kulturális Intezet) を会場として開催された。学術情報センターからは、筆者および大野企画調整官、大埜システム管理課長の3名が出席したが、これは、現在本センターと英国図書館およびEAJRSのメンバーの間で進めている、NACSIS-CAT (学術情報センター目録所在情報サービス) の英国での利用実験に関する討議に参加するためである。

EAJRSは、日本資料に関する在欧専門家の協会であり、実際にはジャパノロジストあるいは日本研究者と日本資料担当図書館員がおもなメンバーとなっている。その発足は、1989年10月26日、「壁」崩壊直前のベルリンで、国立プロシャ文化財図書館に有志70名程を集めて催された設立会議による。この設立会議は、ベルリン日独センターでの第2回国際日本情報会議に引き続いて開催されたもので、会議の召集者である英国図書館東洋収書部日本部門のブラウン女史から本センターあての招請に応え、筆者がこれに出席した。設立会議ではEAJRSとして協力支援すべき活動として、(1)シェフィールド大ダニエルズ教授による日本に関する欧州側現代文献の看視・目録事業、(2)ケンブリッジ大コーニツキー教授を中心とする、欧州所在の明治以前の日本文献の目録編成、(3)日本の現代文献の欧州内における総合所在目録の作成方法に関する研究がとり上げられた。

(3)はケンブリッジ大図書館の小山騰氏から提案されたもので、NACSIS-CATの欧州からの利用可能性を積極的に追求すべきであるとの趣旨であり、EAJRSとしては、同氏を中心にさらに検討を進めることになった。この提案は、上記日本情報会議におけるNACSIS-CATのオンライン・デモンストレーションの成功と、1990年1月に予定された学術情報センターと英国図書館間の国際接続開始とを踏まえたものであった。この件



は、その後関係者間での協議の結果、NACSIS-CATの英国からの利用実験を行うことを当面の課題にすることとして、英国側は、英国図書館研究開発部ペリー部長が、回線接続など技術的な側面を含めた総合的な

調整に当たることになった。今回の EAJRS ブダペスト会議では、こうした展開について報告するとともに、欧州での日本資料の所在目録作成の今後の方向に関して、意見を交換することになったわけである。以下、これを含めて会議全般に互って紹介しておく。

1. 開会および運営事項

会議は先の設立会議で EAJRS 会長に選出されたシェフィールド大学史学部ダニエルズ教授の開会の辞によって始められた。同教授によれば、「近年、欧州での日本資料関係図書館員の立場は従来とは一変した。本情報への強い要求に裏付けられて、彼らは今や key people という位置にある。一方、昨年ベルリンの設立会議での議論にもあったように、一国だけで日本情報を十分に収集するのはますます困難になっている。従って、欧州各国間の協力が必須であり、また学術情報センターなど日本側の機関との連携をも強化してゆく必要がある。」ということである。続いて、ハンガリー日本大使館文化アタッシュ島村氏から祝辞が述べられた後、次のような運営事務的事項の報告および審議が行われた。

- (1) 設立会議議事録確認
- (2) 定款承認 — ドイツでの非営利団体としての法人化をめざして、検討を進めており、ドイツ法令との関係で、現在の定款の改変が必要になるかも知れない。
- (3) 財務担当理事 (Gerd Eickelpasch 氏, Kommunikations- und Datentechnik GmbH, Wurzburg) 報告 — 会費を年間 30 ドイツ・マルクとし、具体的送金方法などを説明。
- (4) 機関誌 — “EAJRS Newsletter” 第 1 号が会場にて配布された。編集は Charlotte Rohde, The Royal Library, Copenhagen (欠席) と Jane Irisa, British Library Document Supply Centre の両氏。今回は、プロシャ文化財図書館極東収書部の Rainer Krempien 氏が、複写・製本して持参した。同氏によれば、この方式での印刷と郵送は同図書館の通常運営活動に含めて実施可能で、今後数年はこの方式 (EAJRS の経費負担を特段要せず) を維持できる見込みとのこと。
- (5) 総会の今後の運営方法 — 会議録の発行などについて、Japan Foundation からの援助を得るべく努力したい旨、会長より発言あり。今回の発表論文の決定稿を会議終了後早急に事務局 (英国図書館東洋収書部日本部門 Hamish Todd 氏) あて送付するものとする。
- (6) 次回総会 — EAJRS (欧州日本研究者協会) の総会 (3 年毎) が、1991 年 9 月にベルリンで開催される予定であり、これに接続して本協会の次回総会を開催するのが、参加者の拡大には有利であろうとの意見も出されたが、結論に至らず、理事側にてさらに検討することになった。
- (7) 会員拡充策 — 現在、スペイン、イタリアからの会員がいないといったこともあり、今後会員の増強に努める。

以下、4 日間に互って、次記のようなテーマでの報告と質疑が行われた。なお、発表順とくくり方は、実際の会議進行とは別に、本稿向きに再編している。総じて、インフォーマルな雰囲気での専門家間の情報・意見交換を目的とするせいか、報告予稿や関連資料が配布される場合よりも、全くの口頭報告のみのものの方が多かったが、上記のとおり、いづ

れ会議録が発行される予定である。

2. 日本資料関係プロジェクト進行状況報告

- (1) 日本関係の現代欧州文献の書誌作成事業 —— Dr Gordon Daniels, University of Sheffield: “Monitoring contemporary European writing on Japan.” この事業については、単なる書誌にとどまらず、日本研究者の評価を加味した展望・総説が有用であろうとの意見が出された。
- (2) 明治以前日本資料の欧州総合目録作成事業 —— Dr Peter Kornicki, University of Cambridge: “The Union Catalogue of early Japanese books in Europe: progress and finds.”

3. 各国事情報告

- (1) ソ連 —— i) Dr Anton Dolin, Oriental Institute of the USSR Academy of Sciences: “Japanese collections in the academic research of Soviet Japanologists.” ii) Dr Olga Moroshkina, Institute for Scientific Information in Social Sciences: “Japanese collections on social sciences of the Institute for Scientific Information in Social Sciences of the USSR Academy of Sciences.”
- (2) チェコスロバキア —— i) Dr Libuse Bohackova, Naprstek Museum, Prague: “Japanese art collections in Czechoslovakia .” ii) Dr Helena Honcoopova: “Collections of antiquarian Japanese books in Czechoslovakia.” (欠席) iii) Dr Kata Kabelacova, Oriental Institute, Prague: “Library and document collections of Japanese material in Czechoslovakia.”
- (3) ハンガリー —— Dr Eva Apor, Library, Hungarian Academy of Sciences: “Japanese collections in Hungary.” この報告は、会場近くの同アカデミー図書館の見学を兼ねて行われた。
- (4) 米国 —— 仁木賢司, Columbia University, 三木身保子, University of California and 牧野泰子, University of Illinois: “Japanese librarianship in the United States.”
- (5) ドイツ —— i) Dr Norbert Adami, German Institute for Japanese Studies, Tokyo: “Japanese resources in Europe as seen from Japan – a personal view.” II) Dr Alfons Dufey, Bavarian State Library: “Plans for the automation of CJK acquisition and cataloging in the Bayerisch Staatsbibliothek.”

4. 日本の機関の状況報告

- (1) 国際日本文化研究センター —— 中司里美「国際日本文化研究センターにおける情報処理について」。小野芳彦: “A new system for inputting Japanese and its training and analysis.”
- (2) 国会図書館 —— 島田邦彦: “The present state of computer cataloguing for Japanese books at the National Diet Library and its future plans.”
- (3) 外務省外交史料館 —— 神山晃令: “The collections and activities of the

Gaiko Shiriyokan.”

5. 英国での NACSIS - CAT 利用実験計画

- i) 根岸: NACSIS - CAT: features for users, database organisation and current status.”
- ii) Ms Shirley King, British Library Japanese Information Service: “The Union Catalogue pilot project: history and aims.”
- iii) 小山騰, Cambridge University Library: “An overview of the union catalogue of Japanese publications in Europe.”

上記のように3名が分担して、当面、英国図書館、ケンブリッジ大図書館ほか英国内数ヶ所の図書館で、現代日本文献の目録作成のため、NACSIS - CAT の利用実験を行うという計画について紹介した。これについて、端末に必要な日本語 DOS とか日本目録規則など、技術的な点での質問の他に、中国語、韓国語を含めた、いわゆるCJK一括して扱えるシステムの方が有利ではないかとの意見が出された。これに対して、目録作成は、結局、資料発行国それぞれの MARC に依存することになるから、CJK の一括処理はむしろ不都合ではないかとの見解を小山氏がのべた。しかし、欧州側からみれば、こうした個別の対応はやはり面倒と考えられるせいか、欧州共通の東アジア目録センターのようなものが望まれるとの意見も出された。C・J・K とはいうものの、要するに極東の同種・類似の言語に過ぎないといった誤解が一般的である中で、日本語に特化したシステムをどう評価してゆくべきか、難しいところであるが、NACSIS - CAT 利用実験の結果をみることは、EAJRS のメンバーにとってともあれ有効と思われる。

6. 総合討議

Round table discussion: Conclusions and future cooperation. 仁木賢司, Dr Anton Dolin, 根岸。

会議の概況は以上のとおりであるが、近年、日本資料への関心は、その内容においても様変わりしている。すなわち、文学、美術、あるいは好事家的異国趣味などとは別に、ビジネスと科学技術という実際的な分野における需要が、にわかに立ち上がってきているという状況であろう。上記の国際日本情報会議も、正式には“International Conference on Japanese Information in Science, Technology and Commerce”と称して、従来風の日本学との相違を標榜しているようである。こうした需要が相応の資金力に裏付けられた有効需要、実需であるのかどうかについては、いまだ釈然としない面があるとはいえ、EAJRS のような日本資料に特化した団体が欧州で結成されたこと自体、重要な進展とみなされるべきであり、日本側からもさまざまな方法、経路での支援が望まれるところであろう。

海外出張報告 — 中国

学術情報センター助手

計 宇 生

学術情報センターの国際共同研究「東アジア文字データベースの国際交換に関する実証研究」の一環として、研究開発部長山田尚勇教授および計宇生助手が、中国国家図書館、中国科学院文献情報センター、中国科学技術情報研究所などを訪問した。

8月9日午前、北京市の北西部にある大学、研究所などが集まっている地区から少々南にある中国国家図書館を訪れた。中国国家図書館（National Library of China、北京図書館とも呼ばれる）は1987年に現在の場所に新しく立てられた。現在では、全国の出版物の収蔵、国家書誌センターおよび全国図書館の中心的な役割を果たすようになった。北京図書館職員数は1987年現在で、1625人、その中、1,132人が専門の職員である。全館の収蔵できる図書（文献）数は2,000万冊（件）であり、1987年末までには1,400万冊（件）の収蔵があり、収蔵量は世界中の国立図書館の中で第5位である。内訳は、図書660数万冊、中国語および外国語の雑誌614万冊（種）、図書以外の資料96万件、新聞9万冊（種）、その他の資料43万冊（件）となっている。

北京図書館には、国内の出版物が全面的に収められて、外国の出版物は百種以上の文字のものが収められている。最近数年のあいだに、毎年5万種以上の図書、1,300種以上の雑誌、3万件あまりの資料が新しく加わっている。非図書資料には国内外の著名作家の書いた原稿、歴史的映像、マイクロフィルム、ビデオ、映画フィルム、およびCDなどがある。また、30数か所の読者サービスポイントがあり、毎日5,000人/回の読者を受け入れている。

北京図書館では、ここ数年、中国語図書流通管理システム、ISDS中国国家中央データ処理システム、中国語図書書誌処理システム、欧文雑誌総合目録作成システム、LC-MARC、ISDS MARC 検索サービスシステム、CD-ROMによる国外文献検索システムが実現された。中国の図書目録データベースは作成の段階にあり、すでに漢字属性辞書の編纂を完成し、中国語図書目録（Chinese MARC）の形式および中国語名称に関する標準を制定した。

1989年に北京図書館は日本電気(株)からACOS-630を2台導入し、それぞれ、欧（含露）文用1台、中、日文用1台に分けて、システム管理、目録処理、規範制御、書誌検索、ソースデータ処理、システムメンテナンス、統計管理などの機能を持つ総合的オンラインシステムを開発中である。

同日午後、北京図書館から数キロ離れた中国科学院文献情報センター（Documentation and Information Centre of the Chinese Academy of Sciences）を訪れた。そこでは、副館長の閻立中氏、計算機室の張希軒女史などに迎えられ、同センターの概要についての紹介を受けた。また、山田教授から学術情報センターの概要について紹介した。

中国科学院文献情報センター（または中国科学院図書館と呼ばれる）は1950年4月に設

立され、中国科学院所属の総合的文献情報機関である。1987年末までの収蔵量は542万冊で、自然科学と社会科学の比は7:3である。現在、新館が建設中であり、1995年に完成する予定である。

また、科学院図書館では、地理的に近くにある北京大学、清華大学とネットワーク（中関村LAN）の構築が計画中である。そのために、学術情報センターに技術員を派遣して、研修することを依頼してきている。

10日午前、北京市の中心部を東西に走るメインストリートである長安街の西の方にある中国科学技術情報研究所（Institute of Scientific and Technical Information of China）を訪れた。そこでは、副所長の包錦章氏、国際部の趙陽陵女史などに会い、情報交換を行った。

中国科学技術情報研究所は1956年に設立され、中国国家科学技術委員会の所轄である。1987年に現在の新しい敷地に移された。主な事業内容は次の4つに分かれている。

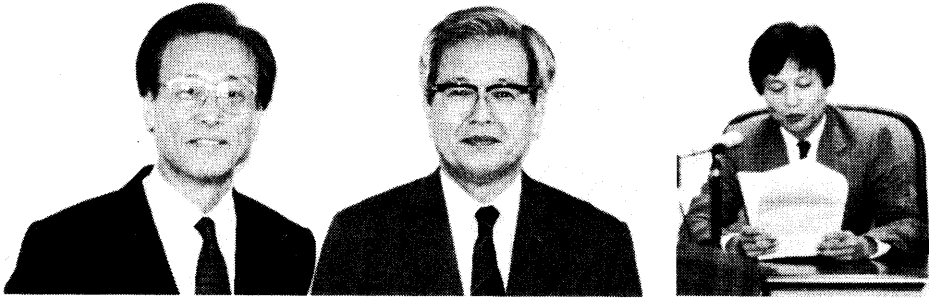
- (1) 情報サービス、すなわち、図書館としての役割。全職員1100人のうち、約250人程度がそれに従事している。
- (2) データベースの作成と運営。（約200人が従事。）
 1. 学会発表論文データベース：中国で開催される学術会議で発表される論文。毎年約2000件。
 2. 学会誌論文データベース：中国の各学会雑誌約4000種の論文の要約。
 3. 学位論文書誌データベース：約5万篇の博士および修士の学位論文が（英文要約付きで）登録されている。
 4. 科学技術成果データベース：約5万件の国家レベルの主な成果。それを省のレベルに拡張することを考えている。
 5. 中国で生産されている工業製品のデータベース：今年から始まったもので、現在1万6千件。
- (3) 研究活動、科学技術情報の分析、統計、比較が主な内容である。例えば、全国で毎年発表された学術論文の統計と分析、各大学の発表論文数によるランク付けなどである。季刊誌「科学技術と発展」を発行している。
- (4) その他。出版、音響・ビデオソフトの制作、テレビ番組の制作など。そのほか、TIPS（Technological Information Promotion System、本部ローマ）に参加している。

同研究所も学術情報センターとの事業上の相似性から、情報交換、人的交流、共同研究の推進などを希望している。

以上のほか、山田教授は8月5日から7日まで北戴河で開催されたThe Fifth International Symposium on Cognitive Aspects of Chinese Languageに出席し、基調講演を行った。また、計助手は8月5日から7日にわたって、中国の東南部の大都市である上海、南京にある上海交通大学図書館と計算機センター、東南大学図書館を訪れた。ちょうど夏休みで、大学構内には学生が少ない時期であったが、それらにおける教育、研究の概要について知る機会を得た。

今回の訪問は、中国における学術情報の管理・サービス部門についての概観および最新の知見を得るのみならず、今後の交流の展開にとって有益であった。

日本における国際書誌調整第6回公開講演会



標記の第6回公開講演会を1990年10月25日(木)午後約50名の参加を得て、学術情報センター別館会議室で開催したので概要を報告する。国際共同研究「東アジア文字データベース」による招へい者の講演会はこれで3回目となっている。

センター企画調整官大野公男教授が開会挨拶を述べたのにつづいて“Database Service in Korea”と題して権忠煥(Mr. Kwon Choong Hwan)韓国産業研究院(KIET)電算室長が、韓国におけるデータベースサービスの現況について報告した。権室長は、自らの長いデータベース作成の経験を踏まえて、勃興しつつある韓国のデータベースの制作と流通とその利用状況について詳細な内容を発表された。海外のデータベースの導入と提供も本格化しつつあり、数十のサービス組織を網羅した内容豊富な現状報告と韓国におけるデータベース産業の問題点の指摘があった。ちなみにKIETは政府出資機関であり、データベースの構築とIRサービスの先導的機関であり、その新しい構想であるCITI設立に関しては第4回講演会において先代の金圭洙室長が論じている。今回招へいした権忠煥氏はその後任である。

朴日在(Dr. Park Il Jae)韓国学術振興財団(KRF)理事長は“The Development of Higher Education in Korea and its perspective”と題して、韓国における高等教育の歴史的な背景および現状と問題点などについて論じられた。もっぱら文部行政にたずさわって来られた経験を基礎として、同国における大学行政の姿が浮かび上がる講演であった。特に韓国の大学における研究活動の現況と、同財団の主要機能の一つである大学の研究のための支援活動について具体的な説明があった。韓国学術振興財団は韓国科学技術財団とならび、ほぼ日本学術振興会に対応する事業内容の機関であるが、わが国の科学研究費に相当する研究助成を文教部と連携して展開している。また、五大電算網計画の進展に呼応すべくKRFが作成してきた研究者総覧データベースや学術雑誌総合目録データベースを中核とするKRFにおける学術情報センター構想の企画も進行中とのことである。

本研究の研究代表者である山田尚勇研究開発部長の講演は「日本語と文字システム」と題して、かねてから要望の強かった文字に関する認識論的な基礎と現状について、資料・話題ともに豊富かつ啓発的な内容の発表を行なった。

ついでながら、第1回講演会で発表された韓国公州大学李春澤助教授の論文は審査を経てセンター紀要第3号に収録された(文責:金容媛)。

学術情報ネットワークの停止

ネットワーク機器の整備及び定期保守等のため、下記のとおり、学術情報ネットワークの運用を停止いたしますので、予めご承知おき下さい。

平成3年3月28日(木) 13:00～17:00

なお、学術情報ネットワークへの加入責任者に対しては一ヶ月前にあらためて確認の連絡をいたします。(システム管理課)

学術情報センターサービス休止のお知らせ

このたび当センターの変電設備の保守点検にともなう停電により、下記のとおりサービスを休止いたします。大変ご迷惑をおかけいたしますが、ご了承ください。

サービス休止日時

- | | |
|---------------|------------------------|
| 1. 目録所在情報サービス | 平成3年2月6日(水) 9:00～11:00 |
| 2. 情報検索サービス | 平成3年2月6日(水) 9:00～11:00 |
| 3. 電子メールシステム | 平成3年2月6日(水) 7:00～11:00 |
| 4. 学術情報ネットワーク | 平成3年2月6日(水) 7:00～11:00 |

なお、都合により時間が前後することがあります。

(共同利用係)

科学研究費による利用期限

学術情報センターシステムの利用料金の支払いが、科学研究費によるものの利用期限は、2月15日(金)までになります。利用料金の請求(納入告知書)は、2月20日頃に送付する予定です。(共同利用係)

学術情報センターシステムの継続手続き

平成3年度も引き続き学術情報センターシステム（情報検索サービス、電子メールサービス及び国際電子メールサービス）を利用する場合は、以下の方法により継続の申請を行ってください。継続の申請が承認された場合は、「利用承認書（継続）」を発行しますので、3月末までに届かない場合は、共同利用係まで問い合わせてください。なお、平成2年度の新規及び追加の受付は平成3年2月16日まで、変更及び取消の受付は平成3年3月30日までとなります。

1. 学術情報センターへの直接申請による利用者の場合

2月上旬に、利用者宛へ継続利用申請書（あらかじめ今年度の情報が出力してある）を送付しますので、各項目を確認・押印のうえ、継続利用申請書を受付期間内（平成3年2月12日～平成3年3月20日）に返送してください。なお、詳細は同封する記入要領及び留意事項をご覧ください。

2. 大型計算機センター経由による利用者の場合

利用者が所属する大型計算機センターへ継続申請してください。所定の手続きを行ったのち、所属センターのコマンド受付期間内に、第二センターとして学術情報センターの継続申請を、第二センター申請コマンド（継続）で行ってください。学術情報センターの受付期間は、平成3年2月12日～平成3年3月20日になります。受付期間を過ぎた場合は、継続申請を行うことができませんので、平成3年4月以降に新規で申請してください。なお、詳細は所属の大型計算機センターへ問い合わせてください。（共同利用係）

フランス CNRS の研究プロジェクト情報の登録

海外研究プロジェクトデータベースは、日、米、英、仏、独、伊、加、スウェーデンの8か国の政府関係研究助成機関等の協力により作成されるデータベースです。

このたび、新たに、フランス CNRS（Centre National de la Recherche Scientifique 国立科学研究センター）から787件の研究プロジェクト情報の提供を受け、同データベースに登録しました。

これにより、日（学術情報センター）、米（NSF）、英（SERC）、仏（CNRS）、独（DFG）、伊（CNR）の6か国6機関の研究プロジェクト情報を収録することになります。

他の機関の情報は入手次第データベースに登録する予定です。（データベース課）

学術論文データベース第二系(化学)の収録対象雑誌の拡大

「学術論文データベース第二系(化学)」に新たに次の雑誌が加わります。具体的な開始期日(平成3年2月を予定)は、決まり次第オンラインニュースでお知らせします。

誌名 : Bulletin of the Chemical Society of Japan
 発行学会名 : 社団法人 日本化学会
 収録範囲 : Vol. 62, no. 7 (1989) 以降

以下は利用者マニュアルの付録3に対応する情報です。(各表の掲載雑誌名, 学会名欄は省略します。)

付録3.1 掲載雑誌の英字略称, ISSN, CODEN 一覧

英字略称	ISSN	CODEN
BC	0009-2673	BCSJA8

付録3.2 論文種類コード一覧

論文の種類	論文種類コード
Regular Articles	ART
Notes	NOT

付録3.3 分野コード一覧

分野コード
General and Physical Analytical and Inorganic Organic and Biological Applied

付録3.4 学会コード一覧

コード
02

利用方法は従来の4誌と同様ですが、雑誌のページイメージのFAX出力はできません。
 (データベース課)

学会発表データベースの参加学会の拡大

学会発表データベースは、各学会の大会・研究会で発表される最新の研究情報を速やかに提供するデータベースとして、電気関係6学会の御協力を得て、昭和63年度からサービスを開始いたしました。その後、参加学会も増え、平成元年4月からは、第一系（電気・情報・制御関連）、第二系（化学関連）としてサービス中であります。

このたび、上記以外の分野の学会からも御理解・御協力が得られ、新たに系列を設け、参加していただくことになりましたので、その状況を次に示します。

平成元年12月14日現在

第一系（電気・情報・制御関連）電気学会、照明学会、電子情報通信学会、テレビジョン学会、情報処理学会、計測自動制御学会、システム制御情報学会、人工知能学会、日本ソフトウェア科学会、日本印刷学会、画像電子学会、トロン協会、プリント回路学会

第二系（化学関連）高分子学会、日本セラミックス協会、日本農芸化学会

第三系（建築・土木・造園関連）日本建築学会、日本造園学会、土木学会

第四系（生物学・農学関連）日本植物生理学会、日本昆虫学会、日本応用動物昆虫学会

第五系（理学関連）日本岩石鉱物鉱床学会、日本鉱物学会

第六系（工学関連）（検討中）

第七系（医学関連）日本歯科理工学会、日本ペインクリニック学会

第八系（人文・社会科学関連）日本西洋古典学会

今後とも、関係学会の御協力を得て、拡充を図る予定です。

なお、第三系以降のデータベースは、準備が整い次第、サービスを開始する予定です。

（データベース課）

研究者ディレクトリのサービス開始

研究者ディレクトリのサービスは、事情によりこれ迄延期をし、利用者の皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。1月22日からサービス開始いたします。

データベース呼出コマンドは、「RES」です。練習データベースも用意していますのでどうぞご利用下さい。

なお、当データベースの概要については、学術情報センターニュースNo.11もしくは利用者マニュアルをご参照下さい。（利用者マニュアルをご希望の方は、当センター共同利用係（03-3942-6933）までお申込み下さい。）

（データベース課）

希望者には電子メールの送り先名称の 表示から個人名を外します

～オフィシャルメールとしてもお使いいただけます～

現行の電子メールは、利用者の送り先名称として①機関名、②部局名及び③個人名が表示される仕組みとなっていますが、平成3年4月より、専ら組織としての使用を希望する利用者には、課名や係名などの部局名までを表示することとし個人名の表示は行わないようにします。このことによりオフィシャルメールとしてもお使いいただけるようになります。

利用を希望する部局の長は、「学術情報センターシステム利用申請書」の『メール宛先名称』欄の『個人名』欄に当該部局名を記入するとともに、『備考』欄に“部局名での利用希望”と記入し申し込んでください。

<メール宛先名称欄記入例>

和 名	組 織 名	(例1) 学術情報センター	(例2) 学術情報センター
	部局名1	管理部	管理部
	部局名2	共同利用課	---
	個 人 名	共同利用係	共同利用課

(共同利用係)

電子掲示板サービス「特定利用掲示板」 の本格運用を開始します

～グループ内の連絡にご利用ください～

学術情報センターにおいては、利用者が共同で利用できるメッセージ交換の場として電子掲示板サービスを行っていますが、当該サービスの一環として試行的に実施していた「特定利用掲示板」の本格運用を平成3年4月より開始します。これは全利用者を対象とした掲示板とは別に、特定のグループのメンバー同士で自由にご利用いただける掲示板のサービスです。

利用を希望するグループの責任者は、「学術情報センターシステム利用申請書」の『備考』欄に“特定利用掲示板の作成希望”と記入するとともに、下記の事項を記入しお申し込みください。なお、当面は、構成員（利用者として登録されているもの）が概ね30名を超える規模のグループの申し込みに限らせていただきます。

<備考欄記入事項>

1. グループの名称（掲示板の主題になります。）
2. 利用対象者（例：日本図書館学会員）及び人数
3. 希望する掲示板名（英数8文字以内）

(共同利用係)

市内局番変更のお知らせ

平成3年1月1日より、NTTの東京(03)地域の市内局番が4桁に変更されます。このため、情報検索サービス及び電子メールシステムで使用する下記の電話番号が変更になります。また、電話番号をパソコン等に登録されている方は変更する必要があります。

通信速度（規格）	情報検索サービス	電子メールシステム
9600bps（V.29 MNP）	(03) 3942-2505	(03) 3942-9311
2400bps（V.22bis MNP）		
2400bps（V.22bis）	(03) 3942-2447	
1200bps（VADIC）	(03) 3942-2939	
1200bps（V.22）	(03) 3942-8941	(03) 3942-7011
300bps（V.21）	(03) 3942-2929	(03) 3942-8081

注) MNPはクラス6までサポート。

(共同利用係)

大学等紀要に関する実態調査の実施

学術情報センターでは、大学等の発行する学術研究紀要に掲載される論文のデータベース化について検討を行っています。このため、これらの紀要の発行状況等を把握するため、国・公・私立大学、大学共同利用機関等を対象とした標記調査を実施中ですのでご協力をお願いします。

(データベース課)

データベース・ディレクトリのデータ更新

平成2年度「学術情報データベース実態調査」の結果に基づき、データベースの更新を10月1日に実施しました。今回のデータは、平成2年4月現在となっています。

また、データ件数は、オンラインサービス機関120件、データベース907件となっています。

(データベース課)

NACSIS-IR システム・データベース収納状況

平成2年12月27日現在

No.	データベース名称	収納件数	収 納 期 間
1	Life Sciences Collection	874,923	1982年1月～最新版
2	MatiSci	728,295	1973年1月～最新版
3	COMPENDEX PLUS	2,148,923	1976年1月～最新版
4	Harvard Business Review	2,466	1927年1月～最新版
5	ISTP & B	1,490,983	1982年1月～最新版
6	EMBASE	1,324,249	1986年4月～最新版
7	SciSearch	2,619,969	1987年4月～最新版
8	Social SciSearch	453,987	1987年4月～最新版
9	A & H Search	408,676	1987年4月～最新版
10	科学研究費補助金研究成果概要データベース	41,372	昭和60年度～最新版
11	学位論文索引データベース	48,721	昭和59年度～最新版
12	学会発表データベース第一系 (電気・情報・制御関連)	36,160	昭和62年度～最新版
13	学会発表データベース第二系 (化学関連)	7,624	昭和63年度～最新版
14	学術論文データベース第一系 (全文) (電子関連) (抄録)	156 887	平成元年度～最新版
15	学術論文データベース第二系 (化学関連)	3,419	昭和58年1月～最新版
16	現行法令データベース	3,544	平成2年8月末現在(最新版)
17	海外研究プロジェクトデータベース	41,135	最新版
18	JPMARC	980,607	1969年1月～最新版
19	LCMARC (Books)	2,919,089	1968年1月～最新版
20	LCMARC (Serials)	479,664	1973年1月～最新版
21	目録所在情報データベース (和図書)	458,364 2,407,657	昭和61年度～最新版
22	目録所在情報データベース (洋図書)	973,809 1,871,968	昭和61年度～最新版
23	目録所在情報データベース (和雑誌)	56,752 1,172,524	最新版
24	目録所在情報データベース (洋雑誌)	107,043 873,156	最新版
25	アメリカン・センター図書館総合目録データベース	6,320	最新版
26	データベース・ディレクトリ	1,027	平成2年4月現在(最新版)

(注) No.21～24のデータベースの上段は書誌件数, 下段は所蔵件数。(システム業務係)

NACSIS-CAT システム・データベース構築状況

平成2年12月27日現在

データベース名称		収納件数	備考(収録期間等)	
総合目録データベース	和 図 書	書 誌	458,433	
		所 蔵	2,407,719	
	和 図 書	書 誌	547,862	
		書 誌 (週 及)	426,042	
		所 蔵	1,872,436	
	和 雑 誌	書 誌	58,852	
		所 蔵	1,413,091	
	洋 雑 誌	書 誌	108,002	
		所 蔵	878,317	
	著 者 名 典 拠	426,951		
	統 一 書 名 典 拠	934		
和 雑 誌 変 遷 マ ッ プ	5,856			
洋 雑 誌 変 遷 マ ッ プ	12,804			
参 照 ファイル	LC/MARC	洋 図 書 書 誌	3,493,496	1968年1月～1990年12月
		洋 雑 誌 書 誌	479,664	1973年1月～1990年12月
		洋 書 著 者 名 典 拠	2,252,665	1977年1月～1990年12月
		洋 書 統 一 書 名 典 拠	12,647	1977年1月～1990年12月
	JP/MARC	和 図 書 書 誌	985,182	1969年1月～1990年12月
		和 雑 誌 書 誌	72,174	1968年8月～1990年4月
		和 書 著 者 名 典 拠	26,288	
	UK/MARC	洋 図 書 書 誌	1,148,231	1950年1月～1990年12月
	TRC/MARC	和 図 書 書 誌	222,631	1985年4月～1990年12月
	GPO/MARC	洋 図 書 書 誌	266,660	1976年1月～1990年4月

(システム業務係)

接続ニュース

前号以降、新たに目録所在情報サービスの参加機関となった図書館は、以下のとおりです。

(平成2年12月現在)

No.	機 関 名	接続日	No.	機 関 名	接続日
138	お茶の水女子大学	2. 9. 11	142	静岡県立大学	2. 10. 23
139	東京電機大学	2. 10. 4	143	岡山理科大学	2. 11. 19
140	岩手医科大学	2. 10. 12	144	常 磐 大 学	2. 12. 5
141	中 央 大 学	2. 10. 12			

この結果、参加機関数は、国立大学 88、公立大学 4、私立大学 46、共同利用機関 5、その他 1、合計 144 となりました。
(共同利用係)

電子メールシステム利用者マニュアルの発行

昨年4月に出版した「電子メールシステム利用の手引」暫定版の内容を、このたび利用者向け利用者マニュアルとして全面改訂し「電子メールシステム利用者マニュアル」を刊行しました。

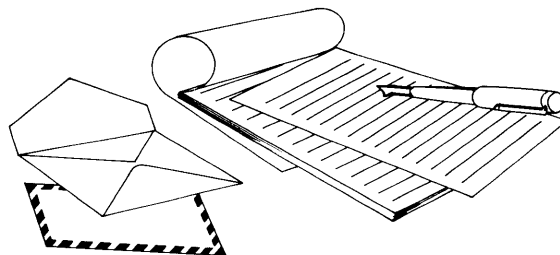
このマニュアルの内容は、電子メールシステムがサービスしている「電子メールサービス」、「ディレクトリサービス」、「電子掲示板サービス」、「国際電子メールサービス」及び接続方法、コマンド一覧、メッセージ一覧など、電子メールシステムの利用方法が判りやすく記述されております。利用者でご希望のかたは、利用者番号、氏名、住所、所属を明記のうえ、下記までハガキまたはFAXでお申し込みください。

申し込み先

☎112 文京区大塚3-29-1 学術情報センター管理部共同利用課共同利用係

FAX 番号 03-3814-4931

(共同利用係)



NACSIS サービス Q&A (1)

I. 学術情報ネットワーク関係

質問1

学術情報ネットワークと大学間コンピュータネットワークとはどういう関係なの
 でしょうか？

学術情報ネットワークは、「学術情報システム」を支えることを目的とした基盤
 伝送路の役割を果たすために用意されています。学術情報ネットワークとは、ひ
 とことと言えば「物理ネットワーク」です。

つまり、道路にたとえれば、道路工事の結果建設された道路の専有使用権を得
 ているわけで、学術情報センターが通信事業者（NTT 等）から必要な回線を借用
 して管理運営しているわけです。

一方、大学間コンピュータネットワークとは、大学等に設置されている計算機
 を「N-1」（「エヌ・ワン」と読みます。）というプロトコルを用いて相互接続を可
 能とするもので、いわゆる「仮想ネットワーク」として構成されています。

大学間コンピュータネットワークが利用する回線網は、当初、NTT がサービ
 スしている DDX-P だけを利用していましたが、学術情報ネットワークの整備
 が進むにつれて、多くの大学が学術情報ネットワークに移行しつつあり、新規接
 続の場合も学術情報ネットワークを利用する機関が増えてきています。したがっ
 て、大学間コンピュータネットワークは、現在、学術情報ネットワークと DDX-P
 の両方を利用しているわけです。

つまり、学術情報ネットワークは、通信網（道路、それも高速道路）の提供サー
 ビスであり、大学間コンピュータネットワークは、それを利用して相互接続を可
 能として各種のサービス（運送業のメニューにたとえられます。）を可能とするも
 のといえます。

このことから、おわかりのように、学術情報ネットワークと大学間コンピュ
 タネットワークとでは運営主体が異なっているため、大学間コンピュータネット
 ワークの利用を希望する場合には、学術情報ネットワークの加入申請とは別個に
 大学間コンピュータネットワークの加入手続きが必要になります。

この学術情報ネットワークを利用している仮想ネットワークには、これ以外に
 図書館業務に利用している「図書館ネットワーク」、特定研究者グループで利用し
 ている「医療情報ネットワーク」や「高エネルギー物理学ネットワーク」等の各
 ネットワークがあり、活発に運用されています。

注「学術情報システム」：研究・教育またそれらを支援する図書館・事務業務に必
 要な種々の情報の形成と流通及び各大学の計算機など各種情報資源の共有を推
 進するために形成されている。

なお、これらの仮想ネットワークの接続相談窓口は次のとおりです。

- ・大学間ネットワーク 各地区の全国共同利用大型計算機センター
- ・図書館ネットワーク 学術情報センター
- ・医療情報ネットワーク 東京大学医学部医療情報部内
国立大学医療情報ネットワーク運営事務局
- ・高エネルギー物理学研究用ネットワーク 高エネルギー物理学研究所
データ処理センターネットワークグループ
- ・宇宙地球理学ネットワーク 京都大学理学部
附属地磁気世界資料解析センター

質問2

学術情報ネットワークを利用するには、どのような手続きが必要でしょうか？

学術情報ネットワークは、国、公、私立の大学、短期大学、高等専門学校等の機関であれば利用できます。

「学術情報ネットワーク加入申請書」を「学術情報センター事業部システム管理課ネットワーク係」宛に提出していただきます。加入手続きの詳細は、「学術情報センターニュース」№7（1988年9月刊）をご参照ください。

質問3

学術情報ネットワークの加入に当たって、加入申請から実際の接続までどの位の日数がかかると考えておけば良いでしょうか？

加入申請書を当センターが受理してから、通常3ヶ月程度です。これは①接続に必要な機器（ノードに用意します。）の準備の都合と②新規接続に当たって学術情報ネットワークの運用を停止する必要が生ずることから、小刻みに接続作業を行なって既往のユーザの利用に支障を来さないように3ヶ月に1回実施しております定期保守のタイミングに集中して接続に必要な機器の増設作業を行なっているためです。従いまして、これらの期間を十分考慮し、接続計画を立案のうえご相談ください。

質問4

接続ノードの選択は可能でしょうか？

接続ノードの決定は、加入機関とノード間の局間距離及びノードの条件を考慮して、学術情報センターで行います。ただし、現用の専用線をそのまま使用する等の理由で、特定のノードへの接続を希望する場合には、加入申請書の「その他特記事項」の欄にその理由等を記述してください。

質問5

接続並びに利用に係る費用及びその負担はどうなっていますか？

接続に必要な機器や利用する幹線網（学術情報ネットワーク）の回線料はセンターが負担しますが、下記の費用は接続機関の負担となります。

①専用線で接続する場合

- ・ノードまでの専用線（回線終端装置を含む）に係る費用。これは、ノードまでの距離及び通信速度により費用が異なります。詳細は、通信回線事業者に照会してください。
- ・ノード交換機と回線終端装置を接続するための費用（約3万円）。これは初期費用です。

②構内線で接続する場合

- ・ノード交換機とモデムを接続するための費用（約5万円）。これは初期費用です。

質問6

LANの接続は可能ですか？

学術情報ネットワークを一種のブリッジとして、TCP/IP手順を用いて大学内LANを相互に接続するための実験的な利用が、文部省の科学研究費補助金を受けて行われています（研究代表者：野口正一 東北大学応用情報学研究センター長）。

詳しくは下記に照会してください

東北大学大型計算機センター 助教授 坂田 真人

質問7

アクセスポイントに接続して利用できるサービスには、何がありますか？

学術情報センターでは平成2年11月1日より電話回線から学術情報ネットワークへのアクセスポイントを全国7ヶ所に設置し、そのサービスを開始しました（表1参照）。

利用方法としては今回は、300bps～9600bpsによる無手順端末サービスのみをサポートします。具体的サービス内容は表2の通りです。

利用方法は「学術情報センターニュース」No.13（1990年10月刊）の20頁以降を参照してください。

（表1）アクセスポイント一覧

地区	電話番号	地区	電話番号
札幌	011-746-0608	大阪	06-878-9864
仙台	022-268-7706	東広島	0824-22-9353
東京	03-5395-1285	福岡	092-632-5057
名古屋	052-781-5995		

（注）「東京」の電話番号は、平成3年1月1日以降も変更ありません。

(表2) 利用可能サーバホスト一覧

センター名	システム	加入者番号	備考
学術情報センター	情報検索	9415300	
	電子メール	9415200	
北海道大学 大型計算機センター	TSS	9115200	
東北大学 大型計算機センター	TSS	9136200	
東京大学 大型計算機センター	TSS	9311600	※1
名古屋大学 大型計算機センター	TSS	9515000	
京都大学 大型計算機センター	MSP TSS	7010004	
	UTS TSS	7010003	
大阪大学 大型計算機センター	TSS	9626500	
九州大学 大型計算機センター	TSS	9816100	

※1：この機関については、現在、ホスト側の環境を準備中です。サービス開始時期については、当該大型計算機センターにお問い合わせください。

II. 情報検索関係

質問1

情報検索の最中に、端末装置の誤動作等で通信が途切れたので、再び接続しようとしたところ、既に、この利用者番号は使われている旨の下記のメッセージが表示され接続できないのですが？

```
JET10035I USERID 利用者番号 ALREADY USED, LOGON REQUEST REJECTED
JET10010A ENTER 'LOGON' OR 'LOGOFF' COMMAND
```

この場合、計算機の中では情報検索処理がまだ継続状態となっています。下記のとおり、再接続の手順（再接続指定のログオンコマンド入力）をとってください。この処理により、情報検索を継続して利用できます。

[再接続指定のログオンコマンド]

LOGON△利用者番号,R

注) R：RECONNECT の省略形

△：半角のブランク

質問2

大型計算機センター等の計算機を経由して、情報検索を行っている場合の処理を中断したい（例：多量の表示があり、途中で止めたい等）場合には、どのような手順をとればよいのでしょうか？

端末装置の操作により、ブレイク信号（Break キーや割り込みキー等による）を送出してください。それにより入力待ち状態となりますので、送信（CR：キャリッジ・リターン）キーを押下してください（この場合、空白も含めて文字等は

一切入力しないでください)。当センターの情報検索コマンドが割り込み状態となり、バッファに残っている若干の情報が表示された後に、中断状態になります。

なお、計算機メーカーにより若干操作が異なる場合がありますので、その場合は各計算機センター等にご確認ください。

質問3

パスワード変更処理の際、構文を誤って入力してしまい、現在のパスワードが判らなくなってしまったのですが？

もし、誤って操作した場合、ログオフしないで、再度パスワードの変更を行ってください。なお、どうしても判らない場合は、下記に問い合わせてください。

学術情報センター管理部共同利用課共同利用係

TEL: 03-3942-6933, 6934

Ⅲ. 国内電子メール関係

質問1

電子メールサービス (NACSIS-MAIL) への接続方法は？

電子掲示板サービス (NACSIS-BBS) を含め、以下の方法が選択可能です。

- ① 計算機センター、図書館等の端末から接続できます。
利用方法は、利用されている大学のシステム担当に相談してください。
- ② パソコン等で電子メールシステムに直接電話をかけて接続できます。電話回線接続後「\$\$\$CON, TSS,, JIS83」を半角の大文字で入力してください。
- ③ パソコン等でアクセスポイントに電話をかけて接続する場合は、次の手順で操作してください。
 - (1) アクセスポイントに電話をかける
 - (2) 「**NACSIS-NET**」表示後、「9415200」を入力してください
 { NACSIS-IR を利用したい場合には、ここで、「9415300」と入力することになります。 }
 - (3) 「COM」表示後、接続コマンド「\$\$\$CON, TSS,, JIS83」を入力してください。

なお、上記の電話番号や一般的な接続方法は「電子メールシステム利用者マニュアル」(平成2年10月刊) P. 81~84 を参照してください。

質問2

電話回線を利用して接続する場合、パソコン等に用意することが必要な通信ソフトとして、どのようなソフトが適当でしょうか？

市販の通信ソフトでは、パソコン通信用あれば概ね利用可能です。例えば、「まいとーく」、「CCT-98」、「PARTY」などがあります。なお、パラメータの設定に当たって、次の点に注意してください。

- ・通信パラメータの設定方法は、通信ソフトごとに異なりますので、通信ソフトに添付しているマニュアルを参考にするか、通信ソフト会社に直接問

い合わせてください。

- 通信パラメータの設定内容は、「電子メールシステム利用者マニュアル」(平成2年10月刊) P. 117～118にあります。

質問3

電話回線から利用した時に、接続コマンド「\$\$\$CON, TSS,, JIS83」を受付けない時がありますが？

「ENTER CONNECT COMMAND \$\$\$CON, TSS,, JIS83」が表示される時は、改めて接続コマンド「\$\$\$CON, TSS,, JIS83」を入力してください。入力する文字は半角の大文字です。入力ミスをした場合は、訂正せずに、一度改行を入力した後に、改めて入力し直してください。

質問4

漢字表示ができないパソコン等の端末は、利用できませんか？

利用できます。接続コマンドは「\$\$\$CON, TSS」を利用してください。電子メールシステムからのメッセージは、英文字で表示されます。なお、電子メールサービスや、電子掲示板サービス中に漢字が含まれていると、この種の端末には漢字部分が意味不明の文字列として表示されますのでご承知おきください。

質問5

パソコン等の MS-DOS(シフト JIS)のファイルをアップロードできますか？

できます。アップロードはパソコン側の通信ソフトの機能によりますから、利用方法等は通信ソフトのマニュアルを参考にしてください。通信ソフトの通信パラメータを「電子メールシステム利用者マニュアル」(平成2年10月刊) P. 117～118に示したパラメータに設定しておけば、通信ソフトが自動的にコード変換してくれます。

質問6

「SIMAIL」コマンドを入力したら、「MHS371E アクセス UA 二重起動エラー(161)」が表示され、利用できなくなる時がありますが？

電子メールサービスを利用中に割り込みキーを入力した時にこの現象が発生することがあります。その場合、「CONN *」を入力してください。割り込みキーを押下した時点からの利用が可能になります。

IV. 国際電子メール関係

質問1

海外メールを利用したいと思っています。しかし、私はメール送り先名称(O/R名)に日本語名しか登録していませんが、利用可能でしょうか？

利用可能です。NACSIS-MAILを海外メールに変換する時は、利用者番号を利用して利用しています。海外から受信する場合のメールアドレスにも利用者番号が利用

されます。このため、メール送り先名称が日本語名だけの登録でも、利用者番号を先方に伝えておけば、受信可能です。もちろん、送信も可能です。ただし、国際電子メールは通常日本語では先方に画面等に表示できませんので、英語の利用が前提とと考えてください。

なお、アドレスの表記方法は「電子メールシステム利用者マニュアル」(平成2年10月刊) P. 55を参考にしてください。

質問2

海外からのメールをより確実に受信するためには、どうしたらよいですか？

電子メールサービス (NACSIS-MAIL) は、国際電子メールの BITNET と CSNET に相互接続をしており、BITNET 向けと CSNET 向けにそれぞれ下記の示す形式でメールアドレスを保有しています。

このため、電子メールサービスの利用者は、海外の通信相手に対して、二つの形式のメールアドレスを知らせておけば、片方のネットワークが障害を起こしたとしても、他方のネットワーク経由でメールを受信することが可能になっています。

電子メールサービス (NACSIS-MAIL) に対するメールアドレス指定方法

BITNET 向け	利用者番号@jpnac.bitnet
CSNET 向け	利用者番号@sinet.ad.jp

当センターが提供している各サービスに等について、各方面から様々な質問や相談が寄せられています。同様な点について疑問をお持ちの方もいるかと思しますので、今回、Q & A の形でセンターニュースにまとめてみました。また、この種の質問等を歓迎いたしますので、文書またはメール等で下記宛にお寄せください。必要に応じて Q & A の欄で説明させていただきます。

問い合わせ先一覧

利 用 内 容	係 名	直通電話番号
・利用申請に関する事 ・利用料金に関する事 ・利用の手引、利用者マニュアルの申し込みに関する事	共同利用係	03-3942-6933 03-3942-6934
・情報検索システムとその運用に関する事 ・電子メールシステム (国際電子メールサービス) とその運用に関する事	システム業務係	03-3942-6945 03-3942-6946
・国際電子メールサービスを除く電子メールシステムとその運用に関する事	ネットワーク係	03-3942-6947 03-3942-6948

※受付時間 月～金 9:00～12:00, 13:00～17:00

メール送り先名称:

「学術情報センター/ユーザ/サービス」または「-UID Z00690」 (システム管理課)

平成2年度第1回総合目録データベース 実務研修を終えて

総合目録データベース実務研修を開始してから（昭和60年度の東京大学文献情報センターを含む）既に6年。今回の研修を終えて、計138人の方々が修了されました。その間いろいろな変遷がありましたが、研修期間も初年度は11週間、2年目は8週間、3年目からは4週間となっています。4週間に定着するまでには、関係者の間で、考え方の曲折が種々あったようです。今回の研修でのアンケートを見ると、研修員の中でもいろいろに意見が別れています。単にカリキュラムだけの問題ではなく、各自の職場環境・家庭環境等で意見の相違が出てくるようです。

センターとしては、現在の所、4週間が研修を受ける側、行う側共、妥当な期間だと考えております。

また、これは期間の長短にも関連の深いことですが、遠隔地から参加する研修員にとっては非常に切実な問題があります。それは東京の宿泊です。研修を効率よく行う為には、センターが宿泊施設を備え安価で快適な宿泊環境をつくることが理想であると、十分に承知していますが、現在はいかんともしがたい状態です。昨年度よりもかなり改善しておりますが、研修員の方々には、まだまだ住みにくい東京暮らしを強要しているようで心苦しく感じています。今後もできる範囲のことは、どんどん早めに対処してゆくよう心掛けてまいります。

その外、今回のアンケートには「研修室が狭く息苦しい」「椅子が大きすぎて不便だ。」「換気が悪い。」「OHPが見にくい。」等の厳しい意見がありました。この様な点については、すぐに、現在行っている第2回の研修に反映しています。

何か言訳めた事ばかりになりましたが、勿論これだけではありません、感想の中には「参照ファイル・総合目録DB等の学習により、深く系統だった知識が修得できた。」「他大学の人達と知り合い、これからもコミュニケーションできる。」「いろいろな問題に対し、理論的に理解し説明できるようになった。」「日常の仕事を離れ研修できたことは有益だった。」「センターに親しみを感じた。」「沢山の資料と要領の良い説明で良く理解できた。」



等々・・・嬉しい感想が書ききれないほどあったんです（ホント!）。今後研修に来られる方は、どうぞ御安心ください。最後に、

細戸さん始め、平成2年度第1回総合目録データベース実務研修修了者の皆さん、これからも元気で御活躍下さい。

（研修係）

平成2年度学術情報センター・シンポジウム開催

平成2年度学術情報センター・シンポジウムは、去る11月13日に神戸文化小ホール、同15日には東京・国立国会図書館新館講堂において「NACSIS データベース事業の新展開と国際化」をテーマに開催され、合計302名の参加があった。所長挨拶の後、下記のプログラムで講演が行われた。

なお、当初講演を予定していたNSF（米国科学財団）のブラウNSTEIN博士は急遽都合により、同財団ゴールドSTEIN博士に変更となった。

記

私にとってのデータベース

大野 公 男（学術情報センター 企画調整官）

EXIRPTS 会議に見る On-going Research 情報への関心

井 上 如（学術情報センター 研究主幹）

北アメリカとグローバル研究インターネットの時代

スティブン N ゴールドSTEIN（NSF）

NACSIS の当面の事業とその展開

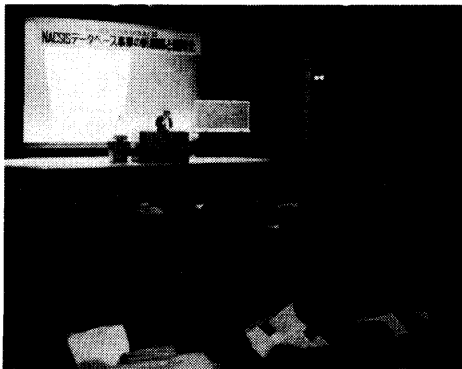
雨 森 弘 行（学術情報センター 事業部長）

NACSIS の EXIRPTS 向けデータベースの形成

由 良 信 道（学術情報センター データベース課課長補佐）

NACSIS における目録所在情報サービスの現状と ILL システムの開発

小 西 和 信（学術情報センター 目録情報課課長補佐）



神戸会場



東京会場

学術情報センター電話番号

1991年1月1日より市内局番に3が付きます

- * 学術情報センターはダイヤルイン ファックス (03) 3814-4931 (管理部)
 となっております。 ファックス (03) 3942-9398 (事業部)
 電話番号は下表のとおりです。 ファックス (03) 3942-2919 (研究開発部)

所 長	(03) 3942-6901	データベース課課長補佐	(03) 3942-6972
企 画 調 整 官	(03) 3942-6902	企 画 係	(03) 3942-6972
秘 書 室	(03) 3942-6919	〃	(03) 3942-6974
管 理 部 長	(03) 3942-6903	文 献 デ ー タ ベ ー ス 係	(03) 3942-6975
総 務 課 長	(03) 3942-6911	〃	(03) 3942-6976
庶 務 係	(03) 3942-6913	数 値 画 像 デ ー タ ベ ー ス 係	(03) 3942-6977
〃	(03) 3942-6914	〃	(03) 3942-6978
人 事 係	(03) 3942-6915	目 録 情 報 課 長	(03) 3942-6981
〃	(03) 3942-6916	目 録 情 報 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6982
国 際 交 流 係	(03) 3942-6917	図 書 目 録 情 報 係	(03) 3942-6983
〃	(03) 3942-6918	〃	(03) 3942-6984
会 計 課 長	(03) 3942-6921	雑 誌 目 録 情 報 係	(03) 3942-6985
会 計 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6922	〃	(03) 3942-6986
総 務 係	(03) 3942-6923	研 究 開 発 部 秘 書 室	(03) 3942-6956
〃	(03) 3942-6924	〃	(03) 3942-6957
経 理 係	(03) 3942-6925	山 田 研 究 開 発 部 長 室	(03) 3942-6904
〃	(03) 3942-6926	井 上 研 究 主 幹 室	(03) 3942-6954
用 度 係	(03) 3942-6927	瀨 田 研 究 主 幹 室	(03) 3942-6952
〃	(03) 3942-6928	内 藤 教 授 室	(03) 3942-6958
施 設 ・ 管 財 係	(03) 3942-6929	根 岸 教 授 室	(03) 3942-6953
共 同 利 用 課 長	(03) 3942-6931	淺 野 教 授 室	(03) 3942-6951
共 同 利 用 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6932	宮 澤 教 授 室	(03) 3942-6955
共 同 利 用 係	(03) 3942-6933	大 山 助 教 授 室	(03) 3942-6950
〃	(03) 3942-6934	小 山 助 教 授 室	(03) 3942-6961
研 修 係	(03) 3942-6935	安 達 助 教 授 室	(03) 3942-6959
〃	(03) 3942-6936	橋 爪 助 教 授 室	(03) 3942-6960
情 報 ・ 資 料 係	(03) 3942-6973	飯 田 助 教 授 室	(03) 3942-6962
〃	(03) 3942-6983	桂 助 手 室	(03) 3942-6969
事 業 部 長	(03) 3942-6905	原 助 手 室	(03) 3942-6966
シ ス テ ム 管 理 課 長	(03) 3942-6941	影 浦 助 手 室	(03) 3942-6968
シ ス テ ム 管 理 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6942	高 須 助 手 室	(03) 3942-6967
シ ス テ ム 管 理 係	(03) 3942-6943	計 助 手 室	(03) 3942-6996
〃	(03) 3942-6944	金 助 手 室	(03) 3942-6990
シ ス テ ム 業 務 係	(03) 3942-6945	相 澤 助 手 室	(03) 3942-6994
〃	(03) 3942-6946	山 田 研 究 室	(03) 3945-3792
ネ ッ ト ワ ー ク 係	(03) 3942-6947	瀨 田 研 究 室	(03) 3944-7504
〃	(03) 3942-6948	淺 野 研 究 室	(03) 3944-7574
デ ー タ ベ ー ス 課 長	(03) 3942-6971	安 達 研 究 室	(03) 3942-6995

学術情報センター日誌

〔平成2年8月1日～11月30日〕

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 8.3～8.11 山田研究開発部長, 海外出張
(中国) | 10.3 イギリス文化相 Mellor 卿他3名来訪 |
| 8.4～8.11 計助手, 海外出張(中国) | 10.3 イギリス王立研究所 Thomas 所長来訪 |
| 9.3～9.17 大野企画調整官・根岸教授・大
埜システム管理課長, 海外出張(ハン
ガリー, オーストリア, イギリス) | 10.11 第1回総合目録小員会 |
| 9.10～9.17 油原国際交流係長, 海外出張
(イギリス) | 10.23～10.28 韓国学術振興財団長他2名来訪 |
| 9.11 ケンブリッジ大学図書館 Bowring 教
授来訪 | 11.13 学術情報センターシンポジウム(神
戸文化ホール) |
| 9.12 AUSTRAL 社 Breton 社長来訪 | 11.15 学術情報センターシンポジウム(国
立国会図書館) |
| 9.21 第12回運営協議会 | 11.20 学術情報センター参加(第3回) |
| 9.29～10.7 浅野教授, 海外出張(アメリカ) | 11.28 第2回総合目録小員会 |
| 9.29～10.8 山之内データベース課長・貝田
ネットワーク係長, 海外出張(アメリ
カ) | |

人 事 異 動

発令年月日	氏名	異動内容 (採用)	旧官職等
2.11.1	田島 嘉則	事業部システム管理課 (転入)	
2.11.1	磯谷 峰夫	事業部データベース課 (転出)	京都大学附属図書館情報管理課
2.11.1	松原 康夫	電気通信大学 総合情報処理センター	事業部システム管理課

学術情報センターニュース(第14号)

1990年12月28日発行

発行人 猪瀬 博

発行 学術情報センター 東京都文京区大塚3丁目29番地1号(〒112)

電話 (03) 3942-6937(直通) 情報・資料係